連載

欧州から (7) イタリア教育事情と EMUFEST

Hiromi J. Ishii
City University UK
Dept. of Music

概要

この連載記事は主に欧州における現在の電子音響音楽に関する様々な活動や問題を電子音響音楽と一般社会、電子音響音楽と教育、電子音響音楽と現代音楽界などの観点からレポートしていく。

This article-series reports today's issues and activities associated to electroacoustic music in Europe from the viewpoints of "electroacoustic music and general society" "electroacoustic music and education" and "electroacoustic music and contemporary music society".

1. ローマ EMU 音楽祭を訪ねて

ローマの聖チェチリア音楽院 (Conservatorio Santa Cecilia) といえば作曲家エンニオ・モリコーネ、オペラ歌手のチェチーリア・バルトリなどが学んだイタリアの名門校である。その名門が今動いている。２００８年からスタートした同音楽祭は昨年で第三回目を迎えた。その第三回 EMUFEST を訪れた際、スタッフの一人である Gustavo Delgado 氏に音楽祭やその背景となるイタリアの電子音響音楽事情を伺うことができた。またその後、同氏からさらに正確な手記をいただいた。イタリア電子音楽の歩みは日本とやや似ている。20 世紀中盤にケルンの電子音楽やパリのミュジーク・コンクレートの出現を受けて 1954 年にミラノの電子音楽スタジオが発足、同じく同時期にスタートした NHK スタジオなどとともに初期電子音楽スタジオとして活躍した。しかし筆者が渡欧した９０年代後半、イタリア電子音楽は欧州においてほとんどといっていいほど影の薄い存在であった。活動が停滞していたのだろうか。それとも国外に対して門戸を閉ざしていたのだろうか。日本の音大では定着しなかった電子音楽教育はイタリアではどうだったのだろうか。Delgado 氏から寄せられた手記『The global language of electroacoustic music』から要約、紹介する。

2. 『THE GLOBAL LANGUAGE OF ELECTROACOUSTIC MUSIC』より

2.1. 聖チェチリア音楽院と EMUFEST

電子音楽作曲家や電子技術のパイオニア達による共同作業は並ならぬ現代芸術、芸術研究、芸術教育方法の改革への道を開いた。過去の記憶無しに現在の電子音響音楽を理解することは限界があるし、表面的なものになってしまうに違いない。イタリアにおける現代はそういった興味深い時である。６０年におよぶイタリア電子音楽史、イタリアの音楽院における３０年におよぶ電子音楽教育史の後、２００８年、イタリア電子音響音楽史上における転換点といえる出来事が起こった。イタリアの音楽院が初めて世界に対して門戸を開いたのだ。聖チェチリア音楽院電子音楽コースはイタリアにおける最初の電子音楽コースのひとつであった。初代担当者は Franco Evangelisti、イタリア及び欧州における実験的前衛音楽のもっとも代表的な作曲家である。彼の功績によりローマ電子音楽派は作品の深みと質の高さで知られてきた。その聖チェチリア音楽院で、国際電子音響音楽祭 EMUFEST が開催されたのだ。

同音楽祭はローマ大学 Tor Vergata、伊・南米インスティテュート、Scelsi 財団、ローマ州、CEMAT そして Nuova Consonanza 協会による協力支援を得ており、過去二回を通して音楽院の教授達、学生達のうちから８０名以上の演奏家が選ばれ参加し、世界３２ヵ国から５００以上の作品が寄せられ、そのうち１５０作品が選出演奏され、すべてのコンサートがほぼ満席であった。

現在、芸術総監督は電子音楽科教授の Giorgio Nottoli に引き継がれている。２０１０年、音楽院は第三回 EMUFEST にあたり、過去二回を通して聴衆、作曲家、研究者、演奏家そして技術スタッフ達とともに決断したように、これが恒久的なものとなることを望んでいる。聴衆が国際的なレベルでの最も代表的な電子音響音楽作品を体験できるという、イタリアにおけるユニークなイヴェントとして、またローマ市の中心部で現在形の技術、楽器奏法や表現法を反映した今日の音楽を聴く機会

として。

第三回音楽祭はこれまで同様高品質８チャンネルシステムをもつ音楽院のサーラ・アカデミカ・デ・コンチェルティをメインの演奏会場とし、八日間の開催期間中には様々なコンサート、会議、特設展が行なわれた。今回初めて中国とアルゼンチンの二つの国の特集コンサートがそれぞれ組まれ、これらの国々における最近の重要作品群が演奏された。また Nuova Consonanza の協力で Franco Evangelisti 作曲コンクールが開かれ、今年は「ピアノとエレクトロニクス」という編成にテーマがおかれた。学生達は選出作品の演奏においてあらゆるテクニカル上また表現上のチャレンジに直面しながら、地元の、また海外のアーティストとのナマの交流を得る機会に恵まれた。

EMUFEST が目指すところは聖チェチリアの学生達先生達という高度な音楽レベルを有する演奏家達に助けられ、入選作品の質の高い演奏を実現することにある。もちろん可能であれば外部協力者に要請することもある。国際的な経済危機の現在にあって、EMUFEST は人材にめぐまれているおかげで守られ特権を与えられている。あなたが電子音響音楽祭を開こうと思ったら、まずどのくらいの費用が生じるのかを実際紙に記してみなくてはならないだろう。貴方の予算書にはホール、ハイファイ・サウンドシステム、マイクロフォン、コンピュータなどのレンタル料、レコーディング、CD 制作、エンジニア、音楽家、ライブ演奏家、指揮者、アシスタント、チラシ・プログラム印刷などの費用が含まれているだろう。音楽家の略歴、作品解説、会議概要、外国語への翻訳、グラフィックデザイン、ロゴ、スポンサー達、報道関係、法的許可等、契約諸関係、宿泊、特別ゲストへのランチ券、そしてあなたが始めに想像もしなかったような、ほとんど無限とも思えるほどの細かい事柄が起こって、あなたは開かれた窓からできるだけ早く自分自身の作曲家としての普通の生活に引っ込もうと思うに違いない。しかし幸いここローマ（音楽院）には「我々がやらなければ物事は決して変わらないのだ」と信じてすすんで挑戦していこうとしている教師学生達がいる。聖チェチリア音楽院には独自の、しかもローマで最も良い音響をもつコンサート・ホールのひとつ『ラ・サーラ・アカデミカ』がある。音楽院には数々の歴史的レコーディングが行なわれた美しいパイプオルガンがあり、音楽院は教育目的としてＤ＆Ｂオクトフォニックシステムとミキシングコンソール、多くのマイクロフォン他オーディオ備品に６０００ユーロをかけた。これらはもちろん音楽祭にも使えるし、音楽院にはサウンドエンジニアである Schiavoni 教授の指導のもとリハーサルやコンサートの音響や録音などすべてのテクニカルな仕事を担うことができる電子音楽上級コースの学生達がいる。

２０１０年の EMUFEST はイタリアの教育改革を踏まえたものとなった。なぜなら参加作品のうちイタリア国内の教師、学生達の応募が次第に増えており、音楽祭が全国の電子音響音楽作曲家達の会合の場となりつつあるのだ。音楽祭中に行なわれた会議では、これに先立つ２０１０年６月に Sassari 音楽院で行なわれた第五回電子音楽集会でのテーマ『教育活動の推進と背景となるイタリア教育改革』が継続され、国内の教師学生達がそれぞれの経験を交換しあい、音楽院や音楽機関における電子音楽の現状を議論し合うために招かれた。詳細はつぎのようである。

2.2. イタリアにおける教育改革と音楽教育そして電子音響音楽

イタリアには５８の音楽院と２１の国立音楽機関がある。約４８の電子音楽クラスがあり需要に応じてひとつの音楽院において二つのクラスが置かれることもある。イタリアでは大学と同じく音楽院は教育省 MIUR に所属している。この点で、電子音楽における最初の学位は例えば数学における最初の学位と同じレベルとなる。教育省は新制度では新分野における教育課程は５年以上になってはならないとしている。イタリアの大学での最初の学位は Triennio(三年コース）と呼ばれその上の専修学位コースは Biennio(二年コース）と呼ばれる。つまりフルキャリアは合わせて５年となる。一方、旧制度においてピアノや一般の器楽作曲など伝統分野での教育は１０年制であった。音楽院が大学の新制度に移行したので、数々の問題が発生した。イタリアの中学・高校には国が決めた音楽科目はない。このため親達は学校長達に外部委託講師を依頼する。昨年までは音楽専門小中学校は存在せず、音楽は特別枠のカリキュラムとして教えられていた。

仮に理系高校を卒業した１８歳の学生がいたとしよう。彼は大学で数学を学ぼうと決心する。これは問題がない。理系高校では彼の決心に備えた数学や物理などの予備知識を学んで来た。こうして次なる大学での三年間の教育はこの学生にとって数学をより深く学ぶのに有効なものとなるだろう。次に同じく理系高校を卒業した別の１８歳の学生を想像してみよう。この学生が大学に進学するのでなく音楽院へ進み電子音楽を学ぼうと決心したとする。数学と物理において優れた成績を取り、入試を合格したとする。入試委員会に対し、彼が多くの現代音楽を聴いていて電子音楽と現代音楽の主だった作曲家達の作品を知っており、そのため芸術と電子音楽に大変興味をもっており、何よりも彼自身が作曲家になりたい、その数学の知識を使って音楽創作をしたいと訴えたとする。すべて問題は無いようにみえるのだが、入試委員会は彼が記譜法において及第点 C の能力すら無いという点を付ける。加えて彼は音楽理論のことを何も知ら

ないのだ。これは厳しい問題である。彼は電子音楽コースに進学できるのだろうか。

電子音楽にも適用されてきた入試の伝統的な規則では、電子音楽を学ぶ以前に作曲か楽器における音楽の学位を持っていることが要求されていた。つまり、旧制度では電子音楽は１０年間の長きにおよぶ作曲や楽器コース卒業後にはじめて学ぶことができる専修コースだったのだ。現在ではすべてが変わった。教育改革により、音楽理論を音楽院入試に合格するために学ぶことはそれほど大変な状況ではなくなった。音楽の予備知識を持たない若い学生であっても入学資格があるとみなされるようになった。ここで、前述の二つのケースを比べてみたい。前者の学生が高校で学んだことにより大学三年間のフルタイムコースで有利にプログラマー、数学者、エンジニアとしての基礎を作ることができるのは明らかだ。しかし、音楽理論とコンピュータ音楽の知識なしの後者、電子音楽コース受験者にも同じだろうか。

現行の改革で最大４０の音楽高校が設立された。これらは楽器か合唱のコースを付加した総合高校である。２０１０年３月１８日現在で教育省が提示した音楽/ 合唱高校の数は２８である。音楽/合唱高校は設立のために、また経済上の理由により、省の認可を必要とし、例えば理系高校内に置くなど現存するあるいは以前の高校の建物を利用しなくてはならない。音楽/合唱高校のカリキュラム内容は、

イタリア語と文学、
地理、歴史、哲学、
外国語と外国文化、
数学、
物理、
自然科学・生物・化学・地学、
美術史、
スポーツ科学、
カトリック宗教か代わりの活動、
音楽演奏と解釈、
音楽理論・分析・作曲、
音楽史、
グループ音楽活動、
音楽テクノロジー、

である。イタリアが理系高校や芸術高校が大学に至る道であるように音楽/合唱高校を音楽院に至る高校として作る必要があるのは明らかだ。しかし解決策はこれしかないのだろうか。そして、音楽院がたった５年間のコースしか置かないとすると、旧制度において最初の５年間を教えてきた教授達の職場はどうなるのだろう。音楽/合唱高校の教師達は音楽院の教授達ではない。彼らの給料はカテゴリー上同じではない。ゆえにイタリアは第二の平行する選択肢を実行した。先を続ける前に、新体制において学生は同時に二つ以上の大学コースに籍を置くことができないという制限があることを伝えておきたい。１８歳の時点で、学生は音楽院か大学かどちらかを選ばなくてはならないのだ。イタリアの音楽院が行なったもう一つの過激な選択は、『プレ・アカデミック・コース』というものである。音楽院はプレ・アカデミック・コースの学則や内容に関して全く自立した決定権を持つが、音楽/合唱高校からの進学者とプレ・アカデミック・コースからの進学者とのレベルのバランスを取らなくてはならないため、内容は音楽/合唱高校のものに大変似たものとなっている。音楽院間でカリキュラムに差異があるが、その内容はおおよそ次のようである。

楽器、
音楽史、
音楽理論と音楽分析、
グループ音楽学習、
合唱、
コンピュータ音楽、
聴音。

聴音とコンピュータ音楽がおかれているのはまったく革新的である。今日の学生達は日常の音楽的音響的生活において新たな答えを見いだしていかなければならないからだ。プレ・アカデミック・コースでは数多くの現実に対応した規則がある。

1. 音楽/合唱高校のように年齢制限をおかない。
2. 教育省から独立した音楽院によるシステムなので音楽/合唱高校高校よりフレキシブルに授業内容やカリキュラムの変更ができる。
3. 学生が充分修得出来る能力がある場合、飛び級ができる（音楽/合唱高校では出来ない）
4. 理系高校で学んだ学生も、音楽院へ進学するのに必要な知識を学ぶ為に卒業時点でプレ・アカデミック・コースに通うことが出来る。
5. これは学位コースではないので、大学に籍をおく学生も音楽院のプレ・アカデミック・コースに通うことができる。これはあくまでも音楽院が将来の学生達のために作った内部のコースなのだ。

2.3. おわりに

何が実際に起こっているのかということについて、首尾一貫したヴィジョンを持つには早すぎるだろう。最初の結果は５年後、第一期音楽/合唱高校卒業生達が音楽院に入学してきた時、彼らのレベルがプレ・アカデミック・コースの学生達と比較されたときに分かることであ

る。一方、私はイタリア人が変化を求めているのだと思っている。国家の有せん課題として、彼らは自らの教育上の危機を俎上にのせた。この危機はしかし、一般的なものかもしれない。なぜなら伝統的な音楽院は今やその教育プログラムを作り直して行かなくてはならない時期に来ているからだ。イタリア人達はその内部闘争を直視するという勇気を持っていた。この教育改革プロセスには、それに伴う国家予算が必要である。イタリア人は歴史と文化の中に彼らの回答を見いだして行くだろうが、同時に音楽院の外にも目を向けて行く視野の広さを必要としている。幸い、グローバル化時代において容易に教育方法の情報交換が行なえるので、徐々にではあるがその扉を開きつつある。これは大きな挑戦であり、私たちは EMUFEST の活動を通してそれに貢献しているのだ。

Gustavo Delgado プロフィール

ブエノスアイレス生まれ。アルゼンチン国立キルメス大学、ローマ聖チェチリア音楽院にて電子音響音楽を学ぶ。M. マシューズ、G. ベネットはじめ様々な作曲家のセミナーに参加。独立した電子音響音楽作品の他にもシアターピース、イヴェント、ポップス、またテレビドキュメンタリー番組などの音楽も手がける。

National Arts Contest 2010、Benevento-Italy、Juan Carlos Paz 2001 にて第一位、Citta di Udine 2004、2010 ファイナリスト他、数々のコンテストに入選、入賞している。1999 年より Nuova Consonanza 協会におけるコンサートにて Piero Schiavoni とともにテクニカル・サウンド・ディレクター、コンピュータ音楽テクニカルサポート、レコーディングスタッフを務める。EMUFEST スタッフ。[翻訳および校正要約・石井紘美]

3. 手記翻訳を終えて

イタリアは音楽の国、といったイメージがある。その音楽教育が実際にはこれまでほとんどプライベート・レッスンに頼ったものであったというのは意外に知られていない。大学への進学コースと技術商業コースに早期に分けられ、ほぼ半数は技術商業高校へ進む、というのがこれまでの進学状況だった。また一方ではナポレオンが設置した超エリート養成大学や音楽院での１０年におよぶ就学課程など、専門家と一般の極端なヒエラルキーが今でも存在している。イタリアの教育制度は重層構造になっているのだ。日本とは大きく異なるところだ。しかし大学進学率が上がり、社会が平均化することによって音楽院での最初の５年間の課程が消滅したからといって、音楽教育のレベルを下げるわけにはいかない。音楽院は信頼できる自前の「予備校」を置くことで入学レベルを旧システムでの前半五年間修了者レベルにキープしようとしていると言えるだろう。

聖チェチリア音楽院では電子音響音楽教育に D. スモーリーのスペクトロ・モルフォロジーや C サウンドを取り入れている、とも Delgado 氏は語ってくれた。古典音楽でのメロディ聴音や和声聴音ではなく新しい聴音のメソッドや、動機・楽節といった音楽分析ではない電子音響音楽独自の音楽分析法も必要となってくるだろう。多種多様な電子音響音楽の創作分野において、先端性を失わず、ドグマ的にならず、どのように若い学生達の耳を育て電子音響音楽創作を教えていくのだろうか。また国際電子音響音楽祭としてスタートした EMUFEST はイタリア国内の活性化に伴いどのように展開していくのだろうか。国内作曲界を中心とした内容に移行していくのだろうか。外国人である筆者としてはブルージュ音楽祭なきあとの欧州で、このままの規模の大きさ音楽的な質の高さを保ちつつ、国際音楽祭としてさらに継続してほしいと願っているのだが。EMUFEST に触発されて今後イタリア電子音響音楽全体がどのように発展していくのか、ぜひ注目したい。

4. 著者プロフィール

石井 紘美 (ヒロミ・イェンチ・イシイ)

博士（PhD. 電子音響音楽作曲/音響美学）。武蔵野音楽大学研究員を経て音響技術専門学校、尚美大学講師ののちドイツ・ドレスデン音楽大学上級課程にてクセナキスの弟子であるヴィルフリート・イエンチに電子音響音楽を師事。Konzert Examen (音楽家資格試験）合格後、英国から奨学金を得て 2001 年よりロンドン・シティ大学にてサイモン・エマーソン、デニス・スモーリーの指導のもと『日本伝統音楽との関係における電子音響音楽作曲』のテーマで博士研究。CYNETart、フロリダ電子音響音楽祭、英国 SAN・EXPO966、北京 CEMC、Musica Viva、ベルギー Musiques & Recherches、オランダ・ガウデアムス、イタリア EMU 祭など様々な音楽祭や音楽週間にて作品が演奏されている。西ドイツ放送、中部ドイツ放送、ベルリン放送、またベルギー、ポーランド、オランダでも作品が紹介されている。2006 年 ZKM 奨学金を得て客員作曲家。WERGO よりポートレート CD『Wind Way 風の道』が出版されている。